芥川龍之介

年　組　氏名（　　）

芥川龍之介は、大正時代に活躍した作家で、日本近代文学史上最も優れた短編小説家である。彼は、すでに東大在学中に『羅生門』を発表して注目され、ついで『鼻』を発表して漱石の激賞を受け、はなばなしく文学界に登場した。初期の作品には、「宇治拾遺物語」や「今昔物語集」など、主として古典に題材をとり、古典を舞台にしたものが多い。その後、写実的な『秋』を転機とし、自伝風な作品も発表していくが、晩年には、とぎすまされた繊細な神経と強烈な自我意識とから、厭世的な人生観を文学的に定着させながらも心身ともに傷つき、「将来に対する漠然とした不安」（遺書）を抱いて自らの命を絶った。

〈略年譜〉

年号（西暦）	歳	事項
明治25（一八九二）	0	東京市京橋区（現東京都中央区）で誕生。辰年辰月辰日辰刻に生まれたのにちなんで龍之介と命名される。
31（一八九八）	6	江東尋常小学校に入学。
35（一九〇二）	10	母フク死去。
38（一九〇五）	13	東京府立第三中学校（現都立両国高校）に入学。
43（一九一〇）	18	成績優秀のため無試験で第一高等学校第一部乙類に入学。同級生に菊池寛・久米正雄・山本有三らがいた。
大正2（一九一三）	21	東京帝国大学（現東京大学）英文科に入学。
4（一九一五）	23	「羅生門」を発表。漱石の「木曜会」に出席し、漱石門下となる。
7（一九一八）	26	塚本文と結婚。
8（一九一九）	27	海軍機関学校をやめ、大阪毎日新聞社の社員となる。
10（一九二一）	29	大阪毎日新聞社の海外視察官として中国に特派される。
昭和元（一九二六）	34	このころより、神経衰弱がこうじて不眠症に陥る。
2（一九二七）	35	七月二十四日、睡眠薬を飲んで自殺、死去。

〈主な作品の紹介〉

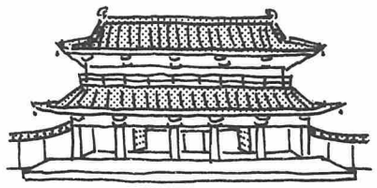
羅生門

短編小説。龍之介の処女作で、「今昔物語集」に題材をとり、人間のエゴイズムをえぐり出し、人間存在の弱さを具象化し、短編作家としての資質と可能性を見せた作品である。

〔あらすじ〕 晩秋のある暮れがた、主人から暇を出され途方にくれる下人が、荒廃した羅生門の下で雨やみを待っていた。彼は、門の楼上に上り、女の死体の髪を抜く老婆を見てねじふせ、その老婆から、生きるために悪をはたらくことを正当化する言葉を聞く。下人の心に悪を肯定する勇気がわき、おれもそうしなければ餓死する身なのだと言い、老婆の衣服をはぎ取って、黒洞々たる夜の中に駆け去る。

〔書き出し〕 ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、ところどころ丹塗りの剝げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。



鼻

短編小説。漱石に推賞された出世作。「傍観者の利己主義」の心理と自尊心のおろかさを、「今昔物語集」「宇治拾遺物語」から材をとって描きだした作品。

〔あらすじ〕 高僧禅智内供は異様に長い鼻をもっていた。彼の苦痛は食事の不便よりも、それによって傷つけられる自尊心にあった。鼻を短くする方法に腐心しているうちにある弟子が秘法を聞きこんできて治療し、みごと成功する。ところが、人々は前にもまして嘲笑し、悪意さえ感じられた。しかしある夜、鼻はふいにもとのように長くなった。内供の心にはればれとした心もちがかえってくるのであった。

〔部分〕 ところが二、三日たつうちに、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があって、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりもいっそう可笑しそうな顔をして、話も碌々せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていたことである。それのみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ落としたことのある中童子なぞは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたとみえて、一度にふっと吹きだしてしまった。用をいいつかった下法師たちが、面と向かっている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後ろさえ向けば、すぐにくすくす笑いだしたのは、一度や二度のことではない。

芋粥

短編小説。欲望は満たされない間が幸福なのであって、満たされればただ幻滅感が残るのみだ、という作者の人生観を主題とした作品である。

〔あらすじ〕 平安朝のころ、風采のあがらない五位の侍がいた。この男の唯一の願いは、芋粥をあきるほど食べてみたいということであった。そして、意外に早くその目的は達せられ、欲望は満たされた。が、同時に彼の内には、かつての芋粥に強い欲望を抱いていたころをなつかしむ気持ちがわいていた。

地獄変

短編小説。人間性を放棄することによって芸術美の完成を得るという、作者自身の芸術至上主義を語る作品。

〔あらすじ〕 堀川の大殿に庇護されている絵仏師良秀は、醜く高慢な男であったが、異常なほどの画才をもっていた。大殿に地獄変の屏風絵を命ぜられ、身分の高い女性が燃えさかる牛車の中でもだえ苦しむ姿を目の前で見せてほしいと願い出る。その夜猛火につつまれた車に縛られていたのは、良秀の愛娘であった。良秀は、さながら恍惚とした法悦の輝きにつつまれ筆を走らせていた。みごとな屏風を完成した次の夜、良秀は自殺する。